

韓国立正佼成会の支部組織の転機と 韓国人支部長の信仰受容の諸相

——教会の増改築が与えた影響に着目して

渡 辺 雅 子

はじめに

立正佼成会は一九三八年に霊友会から分派して東京都で設立された教団で、庭野日敬を開祖、長沼妙佼を脇祖とする。法華三部経を所与の經典とし、夫方妻方（父方母方）双系の先祖供養、心の切り替えによる人格完成を目的とする。日常的な信行は、導き・手どり、法座、法の習学である。日本の新宗教の中では第二位の規模をもつ教団で、『平成二五年度版 宗教年鑑』によると、二〇一二年一月現在の日本国内の公称信者数は約三一〇万人である。海外にはアメリカに五教会、ブラジルに一教会、台湾に二教会、韓国に一教会、タイに一教会、バングラデシュに一教会、スリランカに一教会の一二教会ある。このほか国際伝道本部直轄の拠点が九カ所、南アジア伝道区直轄拠点が六カ所ある。この中で韓国教会は、近年急成長をとげているバングラデシュについて、

韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相

第二位の約三四〇〇の会員世帯があり、会員はほぼ一〇〇%現地韓国人から構成され、着実な歩みをとげている。筆者は、これまで韓国立正佼成会（立正佼成会韓国教会。以下、立正佼成会を佼成会と略す）について、二つの論文を執筆した。一つは「韓国における立正佼成会の展開過程——日本宗教であることの困難と在日韓国人による現地韓国人布教」（渡辺二〇〇五）で、一九七九年に佼成会の韓国布教が開始（ソウルに連絡所が設置、一九八二年に教会に昇格）以後二〇〇四年前半までの韓国佼成会についての展開過程を論述した。もう一つは、「韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容——現地化への取り組み」（渡辺二〇一〇）である。後者の論文の中では上記課題と関連して、二〇〇六年の教会道場増改築以後の展開についても少し述べた。増改築後に変わったこととして、本尊像の色を韓国になじみやすい金色に塗り替え、開祖庭野日敬と脇祖長沼妙佼の写真を本尊のある宝前から戒名室へ移動（写真を掲げることへの違和感への対応）した。昼食を教会でつくり提供するところから弁当持参へ変更し、命日を日本の本部に準じて、毎月一日初命日＝朔日参り、四日開祖命日、一〇日脇祖命日、一五日釈迦牟尼命日の四回に変えた。²⁾

本稿では、二〇〇四年後半以降、二〇一四年前半までの約一〇年間の展開について論述する。韓国佼成会では二〇〇六年から二〇〇七年にかけて教会道場の増改築をした。柱と床のみを残してリノベーションを実施し、およそ一〇カ月にわたって道場が使えなかった。旧道場は地下一階、地上三階で建坪一八〇坪、新道場は地下一階、地上四階で建坪二一〇坪になった。増改築中は近隣のマンションの一室に仮道場をおいたが、一五坪の1LDKの部屋であったため、従来のような活動は行うことはできなかった。これが韓国佼成会に与えた影響は大きい。ことに二〇〇二年二月に李京子（本名李福順、京子は佼成会の選名、一九三六年生まれ）が教会長に就任し、



写真1 韓国佼成会の新教会道場（2014・筆者撮影）



写真2 新しい宝前（2014・筆者撮影）

翌二〇〇三年一月にソウルにおいて三支部体制（このほかプサンにも一支部ある）が敷かれたが、この増改築工事はソウルにおける支部組織自体を揺るがした。これを一つのきっかけとして三支部のうち、二支部が支部長交代という状況になった。危機をうみもしたが、韓国佼成会が新たな段階に向けての出発にもなった。また二〇〇九年一月には李京子から李幸子へと母から娘へと教会長が交代した。

第一章では、教会道場の増改築が教会の支部組織に与えた影響について述べる。また、二〇〇九年の教会長の交代についても言及する。第二章では、城北支部の前支部長であるPさんの信仰受容のあり方と支部長を降りるまで、およびその後の展開について言及する。第三章では、龍山支部の前支部長であるNさんの事例を扱う。第四章では、唯一支部長を継続しているKさんの事例について、信仰受容の諸相に加えて、佼成会と伝統仏教の違い、支部会員の育成の仕方にも言及する。

韓国佼成会の場合、日本の場合に準じて、タテの布教ラインである支部長、主任、組長のほか、ヨコのラインである教会運営にかかわる総務部長、教務部長といった部長職も現在すべてボランティアである。また、支部長や部長職はほぼ毎日といってよいほど佼成会への時間を使うことが求められる。

また、教会の休業日の六のつく日を除いた日には道場当番がある。道場当番は以下のスケジュールで行われる。八時三〇分、教会長が戒名当番長に挨拶。当番が飯水茶を宝前にあげる。九時、宝前お参り、戒名室お参り。九時二〇分まで担当支部朝礼。九時二〇分〜九時五〇分まで教会長、総務部長、支部長、副支部長のミーティング（当日の時は主任も参加）。九時五〇分、当番（導師、脇導師、放送の役、戒名室当番）の挨拶、一〇時〜一〇時三〇分まで経典読誦による供養。一〇時三〇分から開祖・会長の著書の拝読。一一時、法座（教会長が法座主。



写真3 李幸子教会長による法華經講義 (2014・筆者撮影)



写真4 法華經講義を聞く会員 (2014・筆者撮影)

命日の時は教会長の説法が三〇分あり、そのあと支部長が法座主の支部別法座を三〇分行う)、一二時、唱題、その後昼食となる。なお、二〇一三年より、毎月二五日は供養のあと李幸子教会長による法華経講義が行われている。

一 教会道場の増改築と支部組織への影響

韓国佼成会の歴史については、詳しくは〔渡辺二〇〇五〕を参照してほしいが、佼成会の韓国布教は一九七九年二月に連絡所という名称で、布教拠点をもつことよって始まった。賃貸物件から自前の教会道場を現住地に建設したのは一九八七年のことで、一二月に移転し、一九八八年五月に入仏落慶式を行った。一九七九年の布教開始以降、日本からの派遣教会長はビザの関係で日韓を往復するかたちで布教を継続していった。元在日韓国人の李京子は大阪出身の在日二世で、佼成会では組長をつとめていたが、一九八二年に初代韓国教会長の依頼で韓国に戻った。韓国では一九八四年に主任、一九八六年に支部長になり、二〇〇二年一二月に教会長に任命された。翌二〇〇三年一月にソウルに城北支部、龍山支部、儀旺支部の三支部ができ、導きの数が一〇〇人以上あるPさん、Nさん、Kさんが支部長に任命された。壮年部長、青年部長という性別年齢別組織もおかれているが、あまり活発ではなく、佼成会の主力は中年の女性、特に主婦層であり、支部長―主任―組長―班長というのが布教組織である。

教会道場が建設されて一八年たった二〇〇五年に配管設備の老朽化のためにさびた赤い水が出るようになり、

また、手狭にもなった。部分的に修繕することも考慮に入れたが、新しくしたい、エレベーターがほしいという会員の声もあり、日本の本部とも相談し、教会道場の増改築によるリノベーションを実施することになった。³⁾二〇〇六年四月には教会の大本尊像をお色直し（金色への色の塗りかえ）のために日本に送り、戒名室にかけていた絵像の軸装本尊を仮道場に安置した。仮道場として近くの、教会長宅のある同じマンションの一五坪の1LDKの部屋を賃貸した。五月には建設のために仮道場と倉庫に物品を移動、六月から仮道場での布教活動が始まった。

地下一階地上三階から地下一階地上四階にするのは高度制限があったが、設計担当者が調べたところ、低い天井ならば一階増やすことができるということで、四階建にできた。食堂は地下から見晴らしのよい四階に移した。また、会員の使いやすい道場を建設するために、道場建設に経験豊かな日本の本部の知恵をもらい、韓国ではまだ少ないバリアフリー化し、手すりをつけ、エレベーターを設置した。

仮道場においても三支部が月に八、九日当番にあたり（六のつく日は休み）、宝前での飯水茶の給仕、經典誦による供養を行った。その後、法座も行った。導師一人、協導師二人、戒名当番一人、放送の役一人で五人は基本だったが、支部からは大体一〇〜一五人が出て来た。しかしながら、旧道場では当番は午前八時三〇分から午後三時くらいまでそこにいたが、仮道場は狭いため、現場での「手どり」に重点が移行した。また、韓国の寺では参拝者に昼食を出す習慣があり、佼成会でもそれを踏襲していたが、仮道場では台所が小さいので、弁当持参にした。なお、追善供養等の先祖供養は主として会員宅で行うことが奨励されたが、仮道場でも午後追善供養を実施した。個人指導や四柱推命の鑑定が必要な場合は、仮道場の隣の教会長宅で行った。

道場当番以外の支部は現場布教を中心に三～四人が班を組み、額装本尊の祀り込み（もともと総戒名のある家は変更するのにたやすい。そうでない場合は難しい）、追善供養とそのあとの法座、会員宅訪問（手どり）に力を入れた。つまり、これまでは教会道場に参拝し、当番修行をし、教学の学習、法座などを道場に集まって行うことから、外に出での現場布教を徹底することになった。それによって、三支部間の差が明らかになったのである。

これについて当時総務部長だった李幸子（現、教会長）は、本部への「平成一九年次 教会布教計画書―布教伝道方針」の中の「現状・課題」という項目の中で以下のように書いている「以前は集合教育（主に教会道場に集まり、研修、教学の勉強、大法座など）を行っていましたが、道場の工事のため、現場布教を徹底することにより、日頃幹部と一般信者との信頼関係が厚い支部および地区においては現場布教をとおして御守護をたくさん頂戴しておりますが、今まで支部長一人が責任を背負っていた支部は、現場布教をとおして支部長の責任の重さが大きくなり、ある程度までは支部長の力が及ぶところであつてもそうでないところも多く、支部のあいだの手に取るような格差が明らかになってきました。したがいまして、支部長と支部主任との役割分担がなされている支部とそうでない支部との格差のようにも見られます。特に教会長と支部長との信頼関係も重要な点でありまして、信頼の厚い支部は活気があふれ、成長も早いことがわかりました。」

現場布教に際して、追善供養、総供養、手どり、文書の勉強、法座などの一日の報告（手どり日誌）を出させた。内容は、いつ、どこで、何を行ったのか、参加者、連絡事項、法座の内容について二頁に書いて報告させるというものである。また、主任以上には毎月の活動報告書（何をどう実践したのか。成果、問題点、反省）も出



写真5 個人宅での追善供養（韓国佼成会提供）

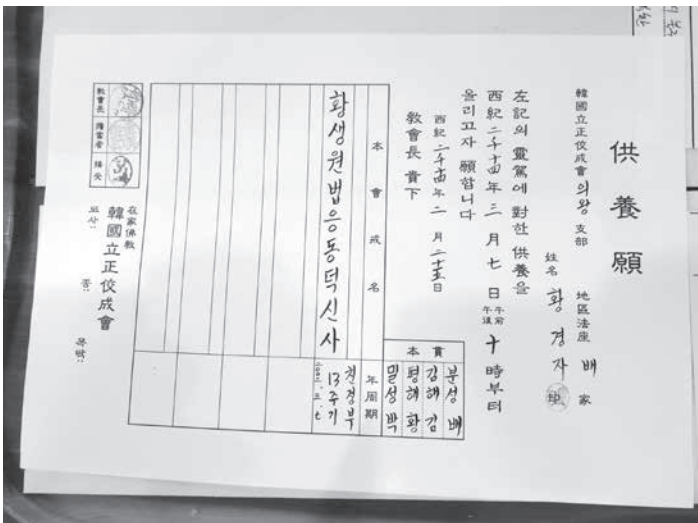


写真6 供養願い（2014・筆者撮影）

させた。これを支部ごとにファイルして、他支部の報告書も閲覧することができるようにし、それを見て布教上何がポイントなのかを考える手がかりとした。

このような報告を出すことによって、支部ごとの差が歴然となった。Kさんが支部長の儀旺支部が突出していた。道場に誘う布教から、現場を訪ねる布教に転換すると、これまでは道場という場で、教会長、総務部長という教会の中心人物がいて、そこに集合することによって、支部の実態がオブラートにくるまれていたが、道場という場がなくなった時に支部長の力量の差があらわになったのである。

また、道場の増改築中だった二〇〇六年一〇月には、開祖生誕一〇〇年の記念団参があり、参加者をつのる手とりもあった。また、この間、李幸子総務部長（当時）は日本語と以前の韓国語訳を検討し、文書部長のSさん（後の城北支部長）は英訳を対照して、庭野日敬著の基本文献『法華経の新しい解釈』の改訂に取り組んだ（二〇〇七年四月改訂版発行）。

それでは次章から、道場の増改築が三支部の支部長に与えた影響に留意しつつ、これを直接間接的な契機として、支部長を退くことになった二人の前支部長の事例と支部長を継続している事例について、以下でみていこう。第二章では城北支部前支部長のPさんの事例を、三章では、龍山支部前支部長のNさんの事例を、四章では、三支部のうち唯一支部長が継続している儀旺支部のKさんの事例を取り上げる。

二 城北支部前支部長Pさんの信仰受容のあり方

属性と入会動機

Pさんは一九四八年一月、全羅南道で生まれた。小学校卒である。夫のAさんは建築業（建築会社を共同経営）で、Pさんは、以前は洋品販売をしていたこともあるが、主婦である⁴。

佼成会に入会したのは、一九八三年五月で、三五歳の時だった⁵。結婚前は母と伝統仏教の寺に行っていた。夫の事業のことやPさん自身の体が弱かったので、ムーダン（韓国のシャーマン）を頼りにしてもいた。寺に行ってもムーダンに行っても「業が深いのか」これをやってもダメ、あれをやってもダメで、聖霊による治癒や悪霊祓いをするヨイド純福音教会（キリスト教プロテスタント・ペンテコステ派）で救われるかと思って通っていたが、そこでもうまくいかなかった。こうした時期に佼成会と出会った。

佼成会に入会するきっかけになったのは、在日韓国人の義父（夫の父）の勧めによる。義父は夫が四〜五歳の時に妻と子どもを置いて日本に密航し、出稼ぎに行った。仕送りはしていたものの韓国に帰ることはなく、日本に定住した。夫が義父（夫にとっては実父）から招聘状をもらい⁶、大阪に住む義父を尋ねたところ、酒飲みだった義父が真面目に暮らしており、酒屋の店主によって佼成会に導かれて一九七四年に入会し、主任の役を担っていた。夫は佼成会で救われたという義父の体験談を聞いて感じるところがあり、また韓国にも佼成会があるので、行きなさいと言われた。当時、夫の仕事がうまくいっていなく、Pさん自身も病名がわからない病気で、身体が

韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相

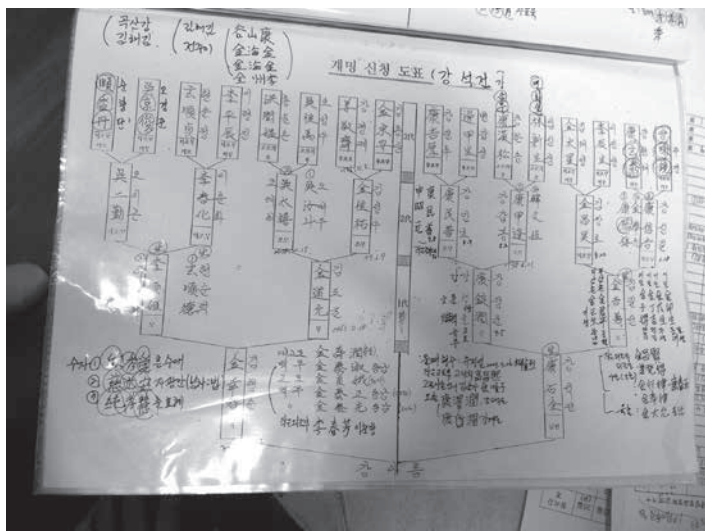


写真7 六親眷属の先祖 (2014・筆者撮影)

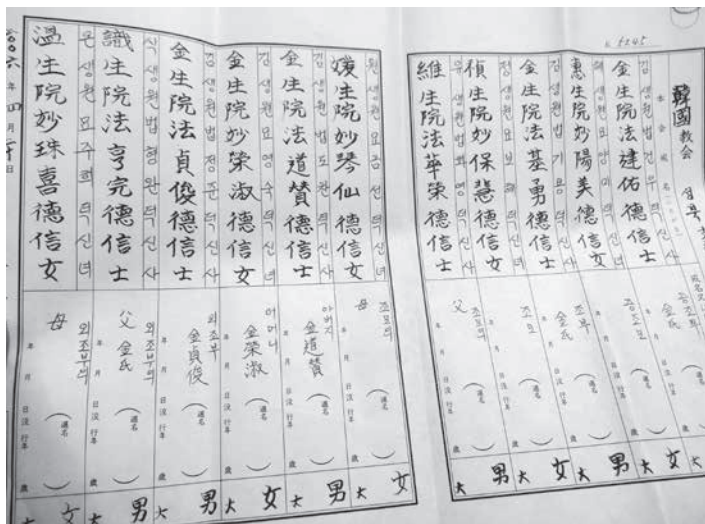


写真8 佼成会式の戒名 (2014・筆者撮影)
 韓国の場合、姓名を入れこんだ戒名になっている

悪かった。ヨイド純福音教会に一年間通っていたが、結果は出ず、もうやめようかと思っていた時期だった。その時に義父から倭成会での先祖供養（倭成会式に新たに先祖に戒名をおくる。また両家の先祖を祀る総戒名を祀る）を勧められた。義父は先祖供養をしっかりとら先祖が守ってくれると言った。一九八三年五月Pさんは夫と一緒に倭成会の道場に行つて入会した。もともとは仏教だったので、倭成会に切りかえるのは簡単だった。倭成会が日本の宗教だということについては、Pさんは、義父が日本にいたので抵抗はなかったという。李京子会長（当時）の指導で、抱えていた問題がよいように変化し、現証を得た（ご利益を得た）。

総戒名を祀り込んだのは入会一カ月後である。一九九〇年には本尊、一九九二年には入神の資格を得、一九九八年には守護尊神を受けている。日本の倭成会では夫方妻方（父方母方）の総戒名の自宅への祀り込みをもつて入会となる。しかしながら、韓国では先祖を自宅に祀ることは抵抗がある（渡辺二〇一〇・九四一—一〇〇頁）。しかしながらPさんの場合は、入会后一カ月で総戒名の祀り込みを行ったことは注目に値する。さらにその上位に位置する守護尊神は神社の社の形をしたものであり、日本の植民地時代の神社をイメージさせるために、韓国では祀り込むことが難しい。Pさんがこれらを抵抗なくしていることは、義父が在日韓国人であり、日本的なものに対する抵抗が薄かったことと関連していると思われる。⁷⁾

入会一年後の一九八四年に班長、一九八六年に組長、一九八九年に主任、一九九九年布教部長、教会に三支部制がとられた二〇〇二年一二月に支部長になっている。家族が全員積極的に活動し、夫は壮年部（倭成会の理事）、長男、長女、次女は青年部、さらに長女は一九九四年に倭成会の海外修養生になった（その後日本の大学院に進学し、大学に就職したが、体調不良から二〇一四年に帰国）。Pさんの導きは一〇〇体以上で、二〇〇四



写真9 総戒名 (2007・筆者撮影)

韓国の場合は、夫婦別姓なので各々の父母の姓の四つを記入



写真10 守護尊神 (2010・韓国佼成会提供)

中央下段にある神社の社の形式のもの

年時点で直接の導きの子から、主任七人、組長八人、班長六人を輩出している。

布教のやり方

Pさんは人の顔を見ると、この人は悩みを抱えているかどうかがわかるという。導きをする時には、自分の体験を話したり、現証的に功德をもらった話をしたり、「二一 日間の祈願供養をしたらどうですか、そうしたら結果がですよ」といった誘い方をする。⁹ また、四柱推命をみてくれる人（李京子前教会長のこと）がいるということも言う。方便を使って人を導く。日本からもらってきた白とピンクのお菓子（落雁）を、これはいっぱいご供養が入っているから、病気の人におわけしたらどうか、と教会長から言われて、やってみたら現証が出たとも言う。またPさんが惹かれているのは因縁法である。「先祖をみたり、周りをみると、因縁というのがわかる。離婚する人の先祖をたどると結婚を三回した先祖がいたりする」のである。このようにPさんの場合は、法を説くよりも「方便」という現世利益、祈願供養などの方法を用いている。接しているうちに相手的心を開いて、何か問題を持ち出した時は仏教の話を伝えるとのことである。「これまで体験でぶつかったが、理論で裏づけられるよう、体験と理論でいきたい」と希望を述べているが、Pさんの場合は体験重視派である。また、Pさんは、「自分には悩みがいっぱいあったから、悩みがあった人を救ってあげたい」とも語っている。¹⁰

Pさんの支部の会員の功德の体験における貧病争の順は、経済、人間関係、病気である。佼成会の魅力については、「以前は持って生まれた運命、相手のせい、条件のせいにしてきたが、『すべて自分』と受けとめるようになった。すべてが自分だと受けとめるということは、因縁法で説いてみると納得がいく。『自分を変える』とい

う教えがすばらしいと思う。すべて感謝で受けとめる。業、因縁を切れるということ、自分の先祖を自分の手で供養できること、そして、佼成会の教えはすべての宗教が仲良くしようとする教えだが、これは魅力、自慢になること」と答える。Pさんは夫の事業のことや自分の体が弱かったことで以前はムーダンをよりどころとしていたが、今（二〇〇四年当時）は法をよりどころとしているという。

Pさんは、現世利益と関連した方便、花祭り（旧暦四月八日に行われる釈尊降誕会）の提灯への布施についてはよくやっており、毎年Pさんは一〇〇個も提灯と布施を集める。¹¹ Pさんは影響を受けた人として、李京子教会長（現、顧問）と李幸子総務部長（現、教会長）をあげ、間違ったことをしたら、叩かれながらやってきたと述べている。

現教会長の李幸子の話によると、Pさんの信心のあり方については、慈悲かけと信心が強いこと、「そうならなかったら私が責任をとる」といったある意味での強引さがあり、また、こうしたらこうなったという体験で行く人だった。Pさんの説き方は因縁果報でご利益を強調し、また実際に現証が出たという。子どもに苦労している場合は、親不孝をしているのではないか、水子はないか、酒で暴れている人には先祖に酒飲みはいないかと尋ね、そして供養し、結果がでた。¹² Pさんはカリスマ的で人をひっぱる人だったという。

支部長から平会員に

Pさんは、支部長になって四年が経過した二〇〇七年一月に、支部長はこれ以上できないと言って平会員になった（正式に支部長を退任したのは二〇〇七年四月）。その後も会費は納入し、花祭りの提灯の奉納は行って



写真11 旧道場での命日の読経供養（2004・筆者撮影）
天井には花祭りの提灯が奉納されている



写真12 新道場での命日の式典（2009・韓国校成会提供）
天井には花祭りの提灯があるが、旧道場より天井がすっきりしている。
旧道場にあった宝前の左右の開祖、脇祖の写真は戒名室に移動

いる。Pさんが支部長を降りることになったきっかけは、教会道場の増改築工事を行なうにあたって、建築関係の会社を共同経営していたPさんの夫が仕事をとれると思っていたが、それが別のところに発注されたことによる。この工事に関しては、五つの会社が候補にあり、教会側はそのうち三つの会社の担当者の面接をした。最終的には日本の本部が専門的な観点から建築業者を選定した。Pさんの夫の会社は、候補に挙がったもののなかでは一番規模が小さかった。ただPさんの夫のAさんは、道場建設に対する情熱、孫子の代まで自慢できるようなものを作りたいという気持ちが強かったとのことである。Aさんは韓国佼成会の理事だったが、仕事が取れなかったことばかりし、教会には来なくなった。当時総務部長で工事全体をとりしきった現教会長の李幸子によると、このことをきっかけにPさんとの距離が遠くなったという。Pさんは李京子教会長（当時）を慕っていたが、そこにも距離ができた。開祖誕生一〇〇周年の日本への記念団参にはPさんは行ったが夫のAさんとその親戚は行かなかった。ほかの支部に比べてPさんの支部の参加者は少なかった。Pさんは平会員になってからも行事や命日には来ていたが、来る日数が減った。教会道場ができあがってその全体像が見え、みながいい建物だとほめるようになって、Pさんは教会に来なくなった。とうとう二〇〇七年一月に支部長を降りると言った（新教会道場には翌二月に引越¹³し）。Aさんは韓国佼成会の理事を辞任した。なお、Pさんはその後、Aさんが体をこわしたこともあって故郷に戻り、ソウルと رفتり来たりすることになった。

Pさんが支部長を降りたのは、建築の仕事を夫の会社が取れなかったことでの夫と教会の間で板ばさみになったこと加えて、増改築期間中には、活動報告を出すよう要請されていたことが負担だったこともある。Pさんは小学校しか出ていないので書くことに慣れていなかったため、報告を書くことが難しかった（これはPさんにか

わって副支部長が書いていた。

Pさんが教会道場に來ないので、購読会員、花祭りの提灯の布施だけの人は足が遠のいた。また、主任・組長で当番に來なくなった人も出た。⁽¹⁴⁾

Pさんの支部のその後

二〇〇七年にPさんが城北支部の支部長を降りたあと、Kさんの支部（儀旺支部）に所属しており、二〇〇三年から教会の文書部長だったSさん（一九五五年生まれ）が、二〇〇八年九月に支部長になった。Sさんは支部長就任以前にも、李京子教会長（当時）に頼まれ、城北支部の面倒をみていた。⁽¹⁵⁾ Pさんは支部長を降りてからは教会道場にお参りして帰るだけで、命日の時に供養のあとに行われる支部の法座には一回入ったことがあるだけだった。当時総務部長だった李幸子がみるところでは、城北支部の副支部長が支部まとめるのは大変な状況で、主任はどんぐりの背比べで突出した人はおらず、みな情があり、信心は深い、法（教学）は説けなかった。二〇〇七年当時の年齢をみると、副支部長は六〇歳、主任は七〇代二人、六〇代三人、五〇代一人、四〇代一人、五〇代の主任は仕事をしているためなかなか來ることができず、実質的には年配者にかたよる構成だった。また、李幸子によると、Sさんを支部長にしたのは、Sさんは主任ではなく文書部長という部長職にあったので、役職上の支部長への移行はスムーズだったという。

Pさんの布教功労者としての表彰

二〇一三年一月に日本の国際伝道本部から韓国教会に布教功労者を一人推薦してほしいとの依頼があった。二〇一四年三月の大聖堂建設五〇周年の記念式典で表彰が行われるとのことである。韓国教会ではPさんを推薦した。Pさんは一二六人を直接導いており、そのうち六人が本尊をもらっていた。また夫のAさんの導きも含めると二五六人の導きがあった。城北支部の初代支部長としてがんばった。夫は韓国教会の理事も務めた。このようなことでPさんを布教功労者として推薦した。¹⁶ Pさんを選ぶことで、他の人から反対はなかった。Pさんは日本の本部の大聖堂で表彰を受けた。Pさんの布教功労者としての推薦は、李幸子教会長にとって気持ちの上でけじめになったという。

三 龍山支部前支部長Nさんの信仰受容のあり方

属性と入会動機

Nさんは、一九五七年一二月に、忠清南道の扶余で生まれた。¹⁷ 大学卒で、主婦である。夫は元バスケットボール選手で、二〇〇四年二月の調査時点では、一カ月前にリストラにあって失業していた。(Nさんの夫はバスケットボールの監督や、コーチをやっていたが、なかなか定職をもつに至らなかった。二〇一四年時点では大学の体育学部の教員をしている。)

Nさんが佼成会に入会したのは、一九八三年一二月である。二七歳、まだ結婚前のことだった。福岡県小倉市

(現、北九州市小倉区)に住む叔母(母の妹)が佼成会小倉教会の会員で、父が脳卒中で倒れた時に、叔母がNさんの母のCさん(一九三〇年生まれ)に佼成会に行きなさいと言った。Cさんは伝統仏教の寺に通い、僧侶のもとで法華経をあげており、佼成会も法華経なので違和感はなかったという。Cさんが入会し、自然と娘のNさんも入会した。また、佼成会が日本の宗教であることには抵抗はなかったとのことである。なおCさんは、入会後一週間で総戒名の祀り込みをした。Cさんは一九九〇年に本尊、一九九八年に守護尊神を自宅に勧請している。Nさんは結婚してすぐ新居に総戒名の祀り込みをした。

母のCさんは仏教のほか、入会以前は、体の悪い時にはムーダンに通っていた。Nさん自身は、佼成会以前に宗教とかかわりをもったことはなかった。入会時に問題も抱えていなかった。つきあっていた男性はいたが、よく精進したら、よい相手と巡り合えると言われた。また、小倉の叔母からは、長男が短命の因縁があるので、入会して行をやったほうがよいと言われた。叔母から招聘状をもらって二カ月間、小倉教会で修行したことがある。Nさんは入会後は、修行を怠けたことはあっても他宗に関心はもたなかったと二〇〇四年の調査時に述べている。

母のCさんは一九八九年に主任、一九九九年に副支部長、二〇〇三年一月に戒名室長になった。娘のNさんは、一九八九年に組長、一九九二年に青年部担当、一九九四年に主任、一九九九年一月に教務部長、二〇〇二年二月に支部長になった。⁽¹⁸⁾Nさん宅には、一九九二年に本尊、一九九八年に守護尊神を勧請している。

二〇〇四年当時には夫は韓国佼成会の理事で、壮年部に所属し、息子は青年部のメンバーであった。夫は積極的に助けてくれる、お役ができるように配慮してくれるとNさんは述べていた。

佼成会の教えについて

Nさんが会員と触れるなかで佼成会の教えの中でまず説明することは、先祖供養だ。「親がいて、先祖がいて、命の源の先祖に感謝する。このような教えは韓国人にとって抵抗はないが、総戒名を自宅に祀り込むことは鬼神が入るといっていやがる。総戒名はまず教会で祀り、その大切さを認識したら家にもっていく。適応期間が必要だ。すぐ総戒名を祀り込む人は、導きの親をよほど信頼している人」と述べる。

Nさんは佼成会の教えで難しいのは「自分自身を変える」ことだと語る。Nさんは一生懸命やったことは会員の手どりだというが、「手どりのポイントは、いいところも悪いところもすべては私の鏡だととらえる」ことだという。また佼成会の魅力は、「サンガ（信仰の仲間）との密接な関係。人間関係はいろいろあるが、サンガの姿は自分の姿と感謝で受けとめる。自分を悟らせるためにあるものと内省する。お互い切磋琢磨し、人格完成を目指して修行する。教会には家庭的な温かさがある。ご法の教えを実生活にあてはめて生活をする。弟はプサン（釜山）で出家して僧だが、伝統仏教と違って、佼成会はかゆいところをかいてあげられる。開祖さまの教えを教会長さんが気学を方便として使いながら教えてくれる」ことだ。そして、「佼成会の教えに触れて、人さまのために菩薩行でやっているうちに、自己中心のだったが、それが薄らいでいくのを感じた」と述べている。

Nさんは二〇〇四年のインタビューで、「自分はわがままだ。何かあつたらすぐ落ち込む。振り回される自分がある。支部長のお役をいただいて一年たったが、すべて自分の成長のために仏様がくれたものとしてお任せした。今は主人がリストラになり、家の中の道具も寿命が来ている。生まれたことは必ず滅するのが現象だ。以前ならそれに振り回される人間が、ここ（佼成会）に来て、やれる自分になったということはずばらしい」とい

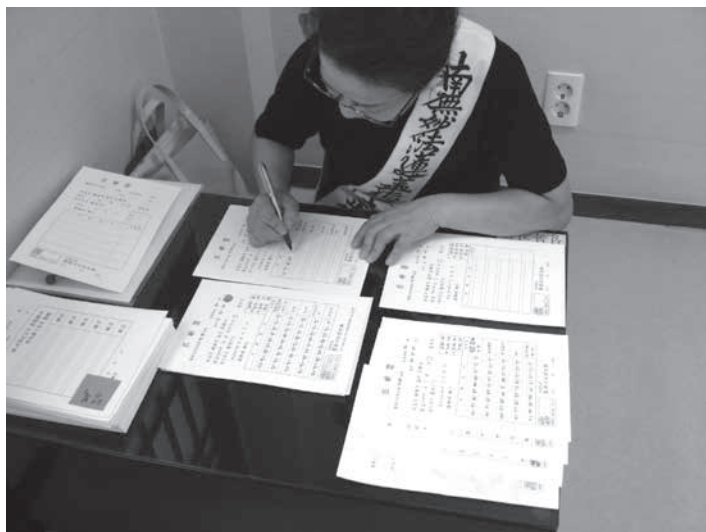


写真13 戒名当番 (2007・筆者撮影)



写真14 旧道場での支部別法座 (2004・筆者撮影)

う。

Nさんへの会員の反発

教会道場の増改築をしていた時期（二〇〇六年）に、Nさんは主任をはじめとする会員から反発されるといふ出来事があった。二〇〇四年当時は、支部長、主任、組長のラインがしっかりしているとNさんは言及していた。また、道場が仮道場に移転する前の三支部では、Nさんのところが会員数も道場に出てくる人も一番多かった。⁽¹⁹⁾

Nさんの支部は仮道場での道場当番は月に八〜九日担当した。そのあと、手どりをした。会員宅で追善供養や総供養を五〜一〇人で行い、そのあとその家を借りて、会議をしたり、文書の勉強をしたり、悩みがあるときは法座を行った。一日に何カ所も行くときもあった。外部への手どりには主任や組長とほとんど一緒に行った。会員宅に手どりに行くことによって、家庭での夫や子どものかかわりを見ることができ、また、教会道場では見えなかったことが見え、理解が深まった。また、手どりをされる人は、何回も足を運ぶと、自分を思ってくれている、心配してくれていると喜んだという。

しかしながら、Nさんが現場での手どりをやったのは仮道場に移転してから最初の三〜四カ月だった。主任がNさんに反発したのである。Nさんは、「自分の悪いところは、酒を飲んでけじめをつけられないことで、会員からいろいろ言われても自分ととれなかった。夫のことも責められた」という。Nさん夫婦ともに酒飲みで、乱れた姿を見られてしまい、主任から酒のことを言われた。⁽²⁰⁾ また、「酒を飲むと次の日、忘れる。忘れたことで教会長から怒られる。他支部（Kさんの支部）と比べられた」のである。「法座でもまとまれなかった。支部長

である自分の言うことを敬うのではなく、主任たちは勝手なことを言った」とも語っている。そこで、夫が「頭を冷やすために、プサンの弟の寺に行ったらどうか」と言った。また佼成会の国際伝道本部の本部長とも相談して、頭を冷やすようにとも言われた。夫はその時は韓国代表のバスケットボールチームのコーチ兼監督をしており、カタールに試合のために行っている時期だったので、二〇〇七年一月一七日から約三カ月間プサンの弟の寺に行った。その前に母のCさんも弟が老後の面倒をみるという^②ことでプサンに転居していた。

主任をはじめとする支部会員のNさんへの反発は、Nさんが酒で乱れた姿をさらしてしまったという現実はあるにしても、これまでの教会道場に行くことが中心の布教・育成から現場へと移行したと関係があると思われる。Nさんは教会道場の「毎日組」（ほぼ毎日道場に出ること）だった。また、会員にも道場に行くことを勧めた。教会道場に行けば教会長、総務部長がいた。仮道場になって、これまでとはかわって主任、組長と組んで外に出ることが主要な実践になり、自分一人で支部長として立たなければならなくなった時に問題が起きたとみることができよう。また、Nさんの活動を側面から支援していた母のCさんがプサンに行ってしまったことも、問題を深刻化させたものだと思われる。

プサンでの伝統仏教での修行と気づき

Nさんは、二〇〇七年一月一七日から約三カ月間プサンに行った。プサンに行く前が支部会員との関係で辛かったという。弟は伝統仏教の曹溪宗の僧侶で、プサンのビルの一室で禅院をやっていた。弟のお供で別の曹溪宗の寺に修行に行った。朝の四時一五分に起床し、朝の祈りののち、一〇時に供養をし、毎日説法を聞いて、寺

で出される昼ごはんを一緒に食べて、四柱推命をみたり、来る人の悩みを聞いたりした。Nさんは、伝統仏教で一〇〇日修行をして、佼成会のやり方と比較して、歩む道がみえたと言語。「伝統仏教ではお坊さんは出家だが、生活に教えが結びついていない。佼成会の生活仏教とはどういうものかわかった。また、伝統仏教では、女の信者の上の人でも経典をおぼえていない。因縁果報もわからない。悩みをどのように現実と結びつけて解決するかわからない。仏性を開いても手どりがないので、そのまま終わってしまう。法で切磋琢磨するサンガはいない。各自はすぐくすぐれていて、奉仕、布施、ボランティアをしても、それを他の人に及ぼすのではなく、そこで終わってしまう。佼成会のサンガでは繰り返し、繰り返し手をかけてくれる。伝統仏教にはそのような人はいない。伝統仏教に行つて、佼成会でいう『まず人さま』がどんなに大切かわかった」。このように伝統仏教で一〇〇日間修行をすることで、Nさんは、佼成会やそこでの人間関係を客観的にとらえることができるようになったという。「人生の行く道が決まった。妄想、執着、現象の奥にある仏の慈悲、教会長さんの愛が見えなかった自分に気づき、何でもハイハイと受け取られる自分でないと救われない。横道をしてわかるようになった。教会長さんの言うことは愛のムチだった。自分はムチがいやだった。しかし、教会長さんが自分を育てくれたことが、プサンに行つてわかった。また、酒に吞まれずコントロールしなくてはいけないこと、酒に対する執着もとれた」と述べる。

Nさんにとって、教会道場の増改築の時、支部間の実績競争になり、特にKさんの支部（儀旺支部）と比べられることがストレスになっていた。「以前は個人の感情でよくみせたい。今は仏の教えの競争なのでレベルが違う。今は仏が喜んでくれるかどうかなので、人との比較ではない」とNさんは語る。

プサンからソウルに戻ってきてても、反発し協力してくれない主任が数人いた。蒔いた種を懺悔して懺悔経を読んで念じた。以前、主任は報告もしてこなかったが、今（二〇〇七年八月時点。ソウルから戻り、三カ月の時期）はしてくるといふ。

またNさんは言及しなかったが、教会道場の増改築中の出来事として、開祖生誕一〇〇周年団参（二〇〇六年一〇月、五泊六日）があった。韓国からは一五三人参加した。韓国では団参への参加者の手どりも、この間行った。韓国ではお会式のパレードで、サムルノリを行うことになった。Nさんはサムルノリのリーダーだったが、団参の前に支部メンバーから責められ、団参に行かないと言ったこともある。Nさんは結局団参には行かなかった。

支部長の辞任・相談役員へ

プサンの伝統仏教への一〇〇日修行の後、Nさんは校成会に戻り、支部会員との関係を再構築しようとするが、あまりうまくいかなかった。二〇〇九年一月の李幸子総務部長（当時）からの聞き取りによると、Nさんは二〇〇七年の冬から二〇〇八年にかけて、夫の仕事がなくなつたので、半年ほどレストランのウエイトレスとして働き、夫の仕事が見つかったのを機にそれをやめた。その後Nさんが龍山支部の支部長を降りたので、二〇〇九年六月に副支部長だったGさん（一九五七年生まれ）が支部長になった。⁽²³⁾

Nさんは支部長を降りてからあまり教会に来なくなり、その後、約三年間全く来なくなった。Nさんは、これまで教会の役で、自分の時間がなくて自由にできなかつたので、やりたかつた習い事に行ったりしていた。二〇一四年春に、Nさんが「お役をしたい、お役がないと自分の人生は何なのかと思うようになった」と言っ

くるようになり、しかし「毎日組」は夫も喜ばず、夫は仕事の関係（大学の体育学部の教員）でソウルの外に住んでいるので、その元に行かなくてはならないため、毎日²⁴は難しいということで、九星をみる「相談役員」という教会全体にかかわる役職を新規につくり、Nさんがその役に就任した。

四 儀旺支部支部長Kさんの信仰受容のあり方

二〇〇二年一二月に李京子教会長のもとに三支部ができた時の支部で、唯一支部長が交代していない支部が儀旺支部で、Kさんはその支部長である²⁵。教会道場の増改築のために仮道場に移転し、主要な実践が道場に来ることから、現場での導き・手どりという布教活動に移行した時に、Pさん、Nさん、Kさんの三人の支部長の実力差が明らかになった。Pさんの場合は増改築工事が請け負えなかったことの夫の不満との間の板挟みという要因も大きなのだが、教会道場の増改築が三支部のうち、二支部の支部長交代に導いたことは意図せぬ結果であった。Pさん、Nさんはいずれも在日韓国人の近い親族がおり、その関係での導きであり、また通常韓国人に違和感のある総戒名の祀り込みも入会後間もなく行い、本尊、さらには神社形式の守護尊神を祀り込んでいるという、韓国では文化的に違和感のある儀礼に対して抵抗なく受容し、日本に対して親和的だという特殊性がある人々である。Kさんは日本には親族がおらず、まさに現地韓国人の信者である。Kさんは長年にわたって伝統仏教の実践もしており、またKさんの支部から、総務部長だった李幸子が教会長になった後任の総務部長、そして城北支部の支部長を輩出し、また現在、主任の数が多ことから二つのグループに分け、当番を行っているというよう

に教会の中心を担っている支部である。⁽²⁶⁾そこで、Kさんの事例では、その信仰受容のあり方以外にも佼成会と伝統仏教との違いや信者の育成についても注目してみたい。

属性と入会動機

Kさんは、一九五七年にプサンで生まれた。大学を一年で中退している。結婚前はOLをしていたが、結婚後は主婦で働いていない。夫は写真家である（夫のちには写真家をやめ、スタジオを貸した家賃収入で生計をたっている。）

実父が牧師なので、小学校までキリスト教の教会に通った。父母は離婚したが、二番目の父が伝統仏教の信者であったことがきっかけで、二一歳から三七歳まで伝統仏教で活動した。ムードンに行ったことはない。佼成会に入会したのは一九九〇年一月のことで三七歳の時だった。Kさんは実母から導かれたが、母は友人から、その友人は近所の人から、その人も近所のCさん（Nさんの母）から導かれた。入会三年後の一九九三年に総戒名を祀り込み、本尊勧請は一九九七年である。一九九五年に組長になり、一九九七年に主任、一九九九年に布教部長、二〇〇二年一二月に三支部制が敷かれた時に儀旺支部の支部長になった。一人娘がおり、佼成会の海外修養生として二年間佼成会の学林で学んだ。

佼成会に入会したのは、義父との嫁舅の葛藤、夫婦の不和、これらが原因で体が衰弱していた時に、母が友人から先祖供養をすれば体がよくなると言われたことによる。先祖供養するには伝統仏教の寺では莫大な金がかかるが佼成会では「真心の布施」でできると聞いて、母が娘であるKさんを救いたいということで、佼成会につ

れていつてくれ入会した。佼成会が日本の宗教であることにははじめは抵抗があった。⁽²⁷⁾

義父とは結婚当初からずっと関係が悪かった。義父は再婚だが、結婚して同居したとたんに義母は嫁が来たから自分は出ていくと言って家を出た。義父は暴力をふるった。夫と義父も関係がうまくいっていなかったが、妻までいじめるので、夫は心の余裕をなくし、Kさんに離婚を申し出た。Kさんの身体に結核、肝炎の症状がでて、もうこれ以上生きられないといわれるくらいひどい病状になった。

Kさんは、夫と別れなさいと言われたら、別れようと思って佼成会に行った。その時に李京子教会長から、一人っ子の娘がこの因縁を背負ってもよいなら離婚してもよいと言われた。業を切らないと娘まで伝わってしまうと指摘された。母は牧師だった父と離婚し再婚した。伝統仏教で因果の法則などを聞いていたので、娘がこの因縁を背負い、苦しい思いをしたらかわいそうだと思った。教会長からは、夫と義父に真心で感謝していたのかと言われた。相手を責めていたことがわかった。朝晩、ありがとうございますと、大きくお辞儀をなさいと言われた。手を合わせたら、義父から早く死ねというお祈りか、死ねというおまじないか、と言われた。夫が帰ってきてお風呂に入ったら、出るのを待つて、タオルで足をふいてあげるようにとも言われた。初めは、夫は何をやっているのかと言った。教会長が実践の仕方を教えてくれた。こうした下がる修行をしてからから、義父との関係がうまくいくようになった。義父は助けられる人に変わった。洗濯物をたたんでくれたりするようにもなった。夫との関係もよくなった。佼成会では下がれというが、自分は夫に下がつていると思っていた。教会長から下がれではなく、主人を立てなさいと言われた。そうしたら「主人のおかげ」という気持が出てきた。夫のやりたいことを賛成すると夫も自分のやることを後押ししてくれるようになり、夫婦関係はよくなった。夫とは生まれ

変わってもまた会いたいと思うくらいよくなった。佼成会には来ないが、夜に信者の手取りで電話が長くなると椅子を持ってきてくれるようにもなったという。

佼成会には母が連れて行ってくれたが、その活動をするのに母が足をひっぱった。母が足をひっぱったおかげで、もっと熱心になった。母からは子どもの時に暴力を振るわれた。母が頼るなど言ってくれたのではないか。その母に対して、おかげさまという気持ちになった時、母も本尊をいただくような人になっていた。佼成会式考え方は教会長やサンガが教えてくれた。教会長との出会いで愛をもらった。それまで自分は否定されていたとKさんは語っている。

佼成会と伝統仏教の違い

Kさんは、伝統仏教の有名な寺に通っていた。伝統仏教では役をしていた。Kさんの場合、伝統仏教の基礎がある。伝統仏教と佼成会の両方に行っていた時期もあるが、次第に佼成会一本になった。そこで、伝統仏教と佼成会の違いについてKさんの目からどのように見えたのかを述べよう。

Kさんは二一歳の時には出家しようと思ったことがあり、伝統仏教が心の拠り所になっていた。伝統仏教では僧が説法する。寺で法門を聞くといひ話を聞いたと思うが、具体的にそれを生活の中でどう生かしていくのかを教えてくれない。⁽²⁸⁾たとえば伝統仏教では、空、無常とか、調和を保って暮らせというが、現実はどうあてはめるのかということは教えてくれない。空の教え（お任せしなさい）には魅力を感じた。佼成会では「お任せしなさい」の具体的なやり方を教えてくれた。僧は若い時に出家しているので、実践の相談に弱い。よい話としても実

生活の経験がない。佼成会の場合は信仰即生活で、道場で学んだことを家庭でも職場でも実践する。

伝統仏教では、何か大きな力に任せながら祈願する。たとえば、経典を何百回繰り返し読み上げるといふ場合や、五体投地を三〇〇〇回するというようなたちで、祈願をさせる。今になってみると五体投置はお辞儀をする修行によって、自分の我をなくす修行だということがわかる。伝統仏教では僧は自分たちだけの学びで、一般の人々にその学びを伝えることはしない。伝統仏教では僧と信者のあいだの差は大きい。

「法華経というすごい教えを開祖さまが、自分たちのような大衆に本当にやさしく説いてくださったって、それを実行することによって、高いレベルまで悟ることができるようにしてくれたのが、佼成会の教えではないかと思う。また、佼成会では根本仏教の四諦の法門を実践できるようにしてくる。伝統仏教には佼成会の法座のような知恵を分かち合うものはない。たとえば川にはまってアップアップしている人には、自ら一生懸命トレーニングして自分で川から上がってこいという教えが伝統仏教だが、一緒に川に入って、一緒に水泳しながら、一緒に出ましようというのが佼成会だ」とKさんは語っている。

李京子前教会長の影響

Kさんが最も影響を受けたのは李京子教会長（当時）であるという。「教会長さんは因縁果報という真理をつかんでいる。そして人に応じて、現実的に実生活でどうやってあてはめたらよいかを具体的に示してくれる。最初は理論で整理し、具体的な例をたて、それを家庭で使えるように教えてくれる。²⁹⁾ 伝統仏教だと僧侶と信者の差があり、信者が僧侶を立てるものだが、教会長さんは信者との差がないくらい、一緒に率先してやってくれる。



写真15 李京子教会長（右）と李幸子総務部長（2004・筆者撮影）



写真16 李京子教会長による大法座（2007・筆者撮影）

そういうことが尊敬できる。教会長さんから恩恵を受けた」と語る。Kさんは「昔から偉大なお坊さんのすぐそばで、侍者のようなお役をしながら、学んでいきたいと思っていた。今、教会長さんのそばで学んでいる」とも述べている。

Kさんは伝統仏教にかかわっていた時は数学が好きだったが、今はそれをどうやって活用をするのかというほうに関心があるという。その活用の仕方が正しいかどうかのチェックは、導き、手どりをしながら行う。相手は自分の鏡だというので、その人の問題や悩み、現状を聞くというふれあいの中で自分の過去がみえる。自分が過去に教えが示されながらもそれを受けとめることができなかつた時の姿を、その人の事例をとおして懺悔する。また新たな問題に直面することによって、自分が新たに勉強もできる。人とのふれあいで気付いたこと、悟ったことは教会長に、今日、こういう出会でこういうことを気付かせてもらったと報告したり、具体的にどういった実践をしていったらよいかを教会長から指導を受ける。また、自分が家のなかで実践して、やって得た結果、心の功德とか実際の功德を会員に分けるのである。

佼成会の魅力と信仰体験

Kさんは佼成会のような点に魅力を感じているのだろうか。Kさんの語りからみておこう。

「利益信仰から本質的な救われまで、どんな人にも相手の機根に合わせて教えてくれ、気づかせてくれる。一人ではなく皆とともに修行できる。法座では家庭で実践できるように指導してくれる。そして感謝の原点を気づかせてくれる。また、自分だけに苦があるという執着から、皆も苦をもっているということがわかり、執着を

捨てられる。人格完成をするために、相手を鏡としてみると向上していける。自分を変えることによって周りに光りが行き届く。支部で問題がある人がいたら、皆で支える。布教しなければいけないというのは、プレッシャーだが、自分もともに成長する。サンガが温かくて、フォローしてくれる。寂しくない。大変な時に支えてくれる恩を感じる。個人的な修行ならばやめていたかもしれない。佼成会の網にかかっている。自分はキリスト教、仏教をやっていたので、佼成会との違いを感じる。佼成会に来て一番魅力があるのは、人間と生まれてお役をやる使命感ができたことだ。自分の心配より、人さまのことを心配できる。菩薩として、自分が願って生まれているということがわかった。一日一日、パワーをいただいで幸せに思う。」

また、「自分が変われば相手が変わる」ということをKさんは実際に体験した。身近では義父、母、夫が変わった。基本信行（供養、導き・手どり・法座、法の習学）を繰り返して実践していく中で、自我が少しずつとれていき、物事を見る見方が変わった。化他^{けた}行にも力が入る。業が自分の代から子どもの代まで、続いていくというのが、多くの人とのふれあいの中ではつきりと見えてきたという。⁽³⁰⁾

六カ月間の休み

Kさんの支部は、二〇〇六年六月から二〇〇七年四月にかけての約一〇カ月間の教会道場の増改築の期間も結束が固く、手どりの報告書もきちんと出し、三支部の中でも卓越した実績をあげた。しかしながら、翌年の二〇〇八年一月から六月までの六カ月間、Kさんが教会に来るのを休むという出来事があった。休もうと思った理由は、まず、夫が自分のそばにいてほしいと言ったことである。夫は写真家だったが、仕事をやめてスタジオを貸

した家賃収入で暮らすようになってから、とくにKさんに家においてほしがった。夫は継母のもとで家庭的な雰囲気の中で育っていないので寂しがり屋だ。夫は佼成会に反対というより、そばにいてほしい、佼成会にたくさん時間を使うので寂しいという気持ちだった。それほど夫が自分に家においてほしいのなら、夫に合わせてあげようという気持ちがあった。そしてKさん自身も気管支が弱く、体が疲れると咳がでて体調がすぐれなかったので、休みをとりながらゆっくりしたいと思った。伝統仏教では寺には行きたい時に行き、本を読みたい時に読むことができたが、佼成会ではそうではなく、緊張の中で「お役」をしていた。また、信仰の面でも整理をつけたところもあった。入会して一八年になり、ここまで修行をしてきたのだから、家でも修行ができるのではないかと、少しの期間休むだけならば、自分なりにやっていたのではないかと、家庭中心になれば、夫もいつか教会に出てくれるようになるのではないかと⁽³¹⁾も思った。一番思ったのは夫と一緒に教会道場に行けるようになったことだ⁽³²⁾という。

また、副支部長⁽³²⁾のFさん（一九五六年生まれ、二〇〇一年入会、現総務部長）がいるが、佼成会の活動を一生懸命やっているのです、彼女に支部を預けて六カ月間休めるのではないかとも思った。支部の人々には夫に一生懸命尽くして、いつかは一緒に佼成会に行きたいと説得した。支部会員は安心して自分の修行を行い、まどわされることはなかった。元々佼成会の修行は人を見るのではなく、教えをみる修行である。

休む期間は六カ月ということはKさん自身決めており、支部の会員もわかっていた。また、休んだといっても寒中読誦修行（一月に一二日間程度、毎朝六時～七時二〇分）と命日（一日、四日、一〇日、一五日の月四回）は道場に行っていた。また、休んではいたが支部のことは副支部長や主任から報告を聞き、教会長と連絡はとっ

ていた。

Kさんは六カ月間休んで気づいたこととして、次のことを挙げる。第一に、佼成会で長いこと修行していたから少し休んでも大丈夫だと思っていたが、家にいると我がでできてしまい、自分の執着から離れられる「緊張した奉仕」⁽³³⁾のありがたさがわかった。一人でいると私がやってあげたという心が出る。おかげさまでということはない。休んでいる時に、自分が夫に合わせてあげたという気持ちが出た。それまでは自分は良い妻、優しい妻だと思っていた。お役のおかげで夫に頭を下げることでできていたのだとわかった。

第二に、支部が調和していたので、六カ月休めたことを実感した。自分ができない時もすぐ対応できる体制がある。支部会員に感謝する心がおきた。

Kさんが六カ月休んだ時に、支部会員は動揺しなかった。Kさんが、なるべく夫に合わせようと努力するのを見ており、副支部長や教会長がフォローしてくれた。また、Kさんの側からは、このように自分も休んでいた経験から、道場に足を運んでいない人を成長していかない人という見方をしなくなったという。

六カ月間休んだ後まもなく夫が腰をいたため一五日間入院したことがあった。病院に付き添い、夫に感謝ができた。李京子教会長から「腰は深いところにある仏様を意味するので夫を仏とみて、仏は何を求めているか考えるように」と言われた。そして夫に対してハイといえる自分になろうとした。⁽³⁴⁾六カ月休んだ後は、夫との約束で一日おきに佼成会に行った。どうしても続けて出なければいけない時は夫に「お通し」をして行くようにした。Kさんが出られない時は副支部長に任せた。

Kさんの信者育成の仕方

Kさんが六カ月間休んだことは支部の危機にはならなかった。Kさんは道場当番こそ行かないが、月に四回は命日参拝をし、教会長や副支部長・主任などの支部会員との連絡は密に行っていた。

支部所属で教会の文書部長をしていたSさんは、二〇〇八年九月に城北支部の支部長に任命された。二〇一〇年一月にKさんの支部の副支部長のFさんは、教会全体の実務的な運営にかかわる総務部長に任命された。これは前年一二月に長年総務部長だった李幸子が教会長に就任したことを受けてのことだった。Kさんが復帰したあと、儀旺支部の重要なメンバーを教会全体にかかわる人材として輩出したのである。

支部が調和し、支部長不在でもカバーすることができたのは、Kさんの育成の仕方がうまくいっていることを示す。Kさんが病弱であることや夫との約束で佼成会に出る日程を制限している点もあるが、そうした状況を支部会員が認知し、支部運営を行っている。それではKさんの育成の仕方をその語りに即してみよう。

教会長や総務部長の教えてくれることを一つも逃さないでうけとって、主任、組長に伝える。「報告・連絡・確認」を繰り返すことで会員が育った。点検や仕上げの確認が難しい。一日が終わって最後の確認をして、これをやったかと聞くと忘れましたということがあつた。繰り返して習慣をつくっていく。会員からはうるさいとよく言われている。そう言われた時は自分自身の信仰を確かめる。佼成会の教えは、すべて自分と受けとめることなので、自分はよくやっていると内省する。報告・連絡・確認と「お通し」（上位の人への報告）は韓国ではあまりない考え方なので身に着くことが難しいが繰り返して行う。

また、難しいのが組織活動である。皆、勝手にやりたい。組長―主任―支部長のラインがはっきり分かれれば、

先輩、夫、親を立てるのも分かってくる。家庭の主婦はこうした組織活動に慣れていない。しかし、だんだん組織活動に慣れてきて、一生懸命やっている。組織が大きくなるにつれ、下まで行き届かなくなる場合があるので、それをきちんと把握して、手を差し伸べるためにも組織は必要と理解していると言うと、納得してくれる。

初めて来た人にこうしなさい、ああしなさいは嫌がる。最初から皆やりなさいとは言わない。方便を使う。教会によく足を運ぶようにと言うといやがるので、大きな行事での奉献の役につける。活発な人には当番修行を、苦の解決には先祖供養、話すのが好きな人には法座を勧める。新しい人には導きの親とその親を担当する主任が付き添う。手どりをすることによって、する側も育つ。

教えるだけでなく、まず自分から見せていく。³⁵対人関係のトラブルがあった時には人を責めるのではなく、自分の中味をみる。しかし、最初から「みんな自分だ」とは言わない。反感をもつ。それも自分だと受ける。「寄り添って」連絡もして、相手がどうなっているかの「慈悲がけ」もする。自分を思ってくれると相手に伝わる。幹部が支部長の話はこうなんですよと説明し、応援してくれる。

当番の時は家事の段取りをつけることが必要なので、支部で情報交換して、家事のやり方を教え合う。李京子教会長が料理を教えてくれた。当番の時は教会に出てくるが、それ以外は三人一組で手どりに歩いている。

幹部を育てること

Kさんは、自分のこつは相手に振り回されない、現象に振り回されないことだという。これには伝統仏教の訓練も役立っている。出てくる現象に振り回されず、奥の奥をみる訓練をする、その人がそうやらざることをえな

かった気持ちをみる。形、態度に振り回されない。相手を恨んだり、憎む心も長くならない。相手をいい悪いではなく、あるがままにみる。ふれあいの中で振り回されない。もともと怒っても声のトーンが通常と同じなのが役にたっている。そうなったのも母のおかげだ。母は感情的な人だったので、母との関係で苦勞した。

二〇一四年時点の活動状況

二〇一四年時点では、Kさんはひと月に二〇日間、佼成会に時間をつかっている。教会にはバスで四〇分かかる。二〇一三年にKさんの支部は他の支部に比べて主任が多いということでABの二つのグループに分けた。儀旺支部が当番を担当するのは他支部よりも多く一二日間で、三〜四日当番を続ける。場合によっては週末しか出て来られない主任もいるので、その場合は臨機応変に対応する。平日の当番は導師一人、副導師二人、放送一人、戒名当番一人の計五人で、命日の当番にはこれに太鼓二人と司会の役が必要なので八人になる。³⁶ Kさんは当番がおわって翌日は休む。これは、体が弱いので続けるのはきついということと、あまり続けて出ないという夫との約束による。

当番の時は八時から一六時まで、当番以外の日は九時二〇分から一五時まで教会にいる。休みの日以外は毎日教会長と支部長のミーティングがある（Kさんが出られない時は副支部長が代行する）。主任たちから前日に報告されたことを教会長に報告する。それ以外にも信者の悩みを教会長に伝え、結んでもらうこともある。

道場当番と家庭との両立

佼成会では当番が重要な実践になる。当番について支部会員は大変だと言うかという問いに対して、Kさんは次のように答えた。「当番は大変だと言います。その時には大変なのはどのようなところかを聞き、自分も当番が大変だった時があったことを話した上で、当番に行くと充電させていただくという気持ちに切り換えるように。当番をするとなら法座に参加する。教会長の話を聞いて気根が高まるので頑張ろう」と言う。当番が大変なのは、朝早く出て来なければならぬことが理由の一つで、ほとんどの人が自宅から教会まで一時間以上かかる。また、夫から佼成会に頻繫に出ることに對する不満も出る。³⁷これについてはKさんも経験があるので、前々日から夫に「この日は佼成会に出させていただきます」と「お通し」をして、「朝食、昼食を真心こめてつくり、昼の時間にお昼を食べましたかと電話をしましょう。家に帰る時は、今、教会を出ましたと連絡しましょう」と指導する。夫が外で勤めている場合も、「お昼はどうでしたか」と尋ねる。こうしたことを続けていくことは習慣になっていく。夫の気持ちとしては、半分は佼成会に出ることを認めるが半分は認めない。しかし、佼成会の教えで、日頃から夫に「寄り添っている」ので、佼成会に出るようになって妻が変わったと皆言われている。たとえばKさんの場合は、「一つ何かがあったら拘泥するタイプだが、お役をしてから一つのこと執着がなくなり、余裕ができた。それを見て、夫の側からは変わったとみえる。一つのこと拘泥すると周りが見えなかった自分から、その時その時に最善を尽くすようになった。そういう話を主任さんに分けてあげる」のである。

支部会員からKさんの自宅への電話については、大変だなど思うほどには来ないという。その理由は、AとBと二つに支部を分けているが、そのグループを担当する主任のリーダーが二人いるので、まずはそのリーダー主



写真17 当番支部による供養（2007・韓国佼成会提供）



写真18 当番支部の法座（2014・筆者撮影）

任が話を受け、そのうえで支部長に伝える。また、当番に出ることが多いので、その時、対面して話をすればよいということもある。

一副支部長一人と一三人の主任のうち、一人が親の介護、四人が仕事をもっている、九人が主婦で、以前に比べて主婦層が少なくなっている。当番等を行う活動会員は組長までである。問題は主任が忙しくなってきたので、導きや手どりが難しい。主任の中で「毎日組」は五人だ。

法の習学・手どり・導き・法座

Kさんが一生懸命やっているのは法の習学であるという。Kさんは伝統仏教を長いこと信仰していたが、倭成会との違いは生活仏教であることにみている。会員との触れ合いの中で、法座で結んだり、その話を聞いていくうちに法が身につく。法によって自分が救われたことをみんなに分けていく。「自分の頭の中には四諦の法門（苦諦、集諦、滅諦、道諦の四つの悟り）⁽³⁸⁾が入っていて、物事をそれに合わせながら見る。本来は仏性があるのに、妄想と執着で発揮できない。主任の育て方は、悩みが出た時、四諦の法門に合わせて聞く。法にあてはめて実践させる。八正道、六波羅蜜を実践するようにし、人さまの心配行をしていたらば、自分の心配行もなくなる」と語る。

手どりには一緒に行く。Kさんが相手に話していることを聞いて、主任は見方、受け取り方を学ぶ。手どりに行く先は、あまり来ない人、主任が倭成会の縁に触れてもらいたいと思う人で、あの人はだめだと決めつけている場合も手どりに行くときそういう人ではないということがわかる。Kさんの育成は主に主任に対してで、主任は

また組長を育成する。

問題は導きができないことだ。支部長になったころ（二〇〇三年）には導きが活発だった。主任は自分の信仰はしっかりとしていて、手どりに目が向かないのがつらい。導きがなぜできないのかという理由は、自分の生活でとまっけていて、導きをする気持ちがない。当番で精いっぱい導きに行くのはしんどいということが挙げられる。けれども導きや手どりが大変だと言っても、そのおかげで法に触れられることもある。

法座で出る話は、子どもとの関係に関すること（ニート、ひきこもり、親子間の断絶など）、夫婦間の問題（経済的な問題、夫が求める妻像にできない）、手どり、導きがうまくいかないなど、その時その時によって異なる。法座では相手の気持ちをよく聞く。意識的に相手を決めつけてありのままに見ることができない自分があるの、そうしないように接している。そうして法にふれさせるようにしている。できない時には教会長に執着をとってもらうように聞く。そうすると新しい見方で見える。人と合う合わないは以前は多かった。今はこの人はこういう状況だが、いずれよいお役をしてくれると見ることができるといえる。こうしたように徐々に変わっていった。

佼成会活動と夫との関係

Kさんの支部では、毎日組は五人いる。毎日組でなくても、当番をやる人は二〇人、命日に教会に来る人はこのほかに二〇人、当番には来ないが大きな行事に来る人は一三〇〜一四〇人いる。花祭りの提灯は五〇〇個集まる。佼成会に熱心になればなるほど、家をあけることが多くなる。韓国で夫が妻に求める像というのは、夫の言うことに従う、女らしい、いつも笑顔、酒を飲んでいても温かく受け入れるといったことだといえる。妻が佼成会

に出ると家にいないので、夫は不便を感じる。そこで、佼成会に出させてもらうのは妻側の弱みなので、夫に尽くすようになる。そうすることで、夫婦関係が好転した人もいる。家事もちゃんとやり、夫が少し手伝ってくれてもほめるようになる。

Kさんは一カ月に二〇日間佼成会のために使うと決めているので、その中で教会の中で活動のほか、外に手動りに行ったりする。一〇日間は佼成会の活動をしないのは、夫との関係である。Kさんの夫は二〇一四年の時にはすでに仕事は引退していたので、家にいる。また、夫がずっとKさんに合わせてくれたので、一〇日間はフルに夫のために使う。また佼成会に行く日も食事は三食とも準備する。帰宅するのは五時三〇分ころである。

Kさんは二〇代から仏教の教えを学びたいと願っていた。伝統仏教に通っていた時は自分が学びたいということだったが、佼成会のおかげで生きがいになったと語る。

二〇一四年二月の調査時にKさんは支部長をするのはあと二年だと述べた。夫との約束で六〇歳になったら支部長を引くと五年前に決めたという。夫はKさんが佼成会で時間を使うことで、寂しい思いをしたので、これ以上は寂しい思いをしたくない、Kさんにいつもそばにいてほしいということだ。Kさんの場合、体が弱いこともあるが、夫との約束で佼成会に出る日にちを限っている。

Kさんの支部では人材（総務部長、城北支部長）を輩出していること、主任の数も多く、支部を二つにわけて当番にあたっていることなど、人材育成においても力があり、常に教会長との連携のもと行っている。Kさんが支部長を退く場合には、それに備えてさらなる支部幹部の育成が必要になってくるだろう。

おわりに

これまでみてきたように、韓国佼成会ではここ数年の間に主要な役職の異動があった。日本からの派遣教会長の時代から現地の教会長へと流れの中で、元在日韓国人であった李京子が二〇〇二年二月に教会長に就任し、ソウルに城北支部、龍山支部、儀旺支部という三つの支部が作られた。この三支部の試金石になったのが、はからずも二〇〇六年六月から二〇〇七年四月にかけての約一〇カ月間にわたる教会道場の増改築であった。仮道場への移転とそれにもなつて集まる場としての広い道場の不在の中で、各支部長の実力が問われることになった。それに建築関係の仕事の受注ができなかったという要因が加わつて、城北支部の支部長Pさんは辞任することになり、また、龍山支部の支部長のNさんも支部内での人間関係に問題が生じ、辞任することになった。唯一儀旺支部のみ、支部長のKさんが継続した。城北支部では儀旺支部所属の文書部長のSさんが二〇〇八年に支部長に就任、龍山支部は副支部長のGさんが二〇〇九年に支部長に就任した。

二〇〇三年に支部制が敷かれて三年を経過した時期に、教会道場の増改築によつて、従来の道場という空間がなくなつたことで、支部間、すなわち支部長の実力の差があらわになった。ここで、支部長の交代が行われるが、在日韓国人に近い親族がおり、それが入会と密接にかかわり、総戒名、本尊、とりわけ日本の神社の形をした守護尊神の祀り込みにみられる日本式に抵抗がなかった人々から、教会長家族を除いて生粋の韓国人が佼成会を担うという新たな段階に入った。これは韓国佼成会の展開の歴史にとつてもエポックを構成するものだと思われ

る。

教会全体にかかわるものとしては、二〇〇九年一二月に李京子教会長が顧問に退き、佼成会の韓国布教の初期からかかわった総務部長兼教務部長の李幸子が教会長に就任した。総務部長の役職には、儀旺支部の副支部長だったFさんが就任、教務部長は城北支部の支部長のSさんが兼任した。このように二〇〇八年から二〇〇九年にかけて、韓国佼成会においては人事の点で転換点となった。

教会長の交代は往々にしてやり方の違いで問題が生じる場合があるが、韓国佼成会の場合、前教会長の李京子と現教会長の李幸子は母娘の関係にあったので、問題はなく、むしろサポートがあった。李京子は教会長をやめてもプサンの布教に携わる時以外は、道場には毎日出てきた。これまでは李京子は情（法座や個人指導）、李幸子は知（教学）という特徴に応じての役割分担があったが、李京子は李幸子の教会長への移行期において足りないところを補った。また、李幸子は総務部長兼教務部長で教会運営の中核を担っていたので、教会長への移行はスムーズだった。

二〇一二年三月には李幸子教会長は日本の本部大聖堂で体験説法をした。また、教会長就任三年目ということ、他の三年目の教会長とともにインド仏跡参拝をした。七月にはサハリン道場入仏式の帰途、庭野光祥次代会長が韓国佼成会を訪れた。九月には韓国教会設立三〇周年の記念式典が行われた。二〇一二年は、こうしたさまざまな出来事があった。翌二〇一三年一月から李京子は体調を崩したので、三〇周年という大きな式典が李京子とともに乗り切れたことは幸いだった。

二〇一四年三月には、城北支部の前支部長のPさんは、大聖堂建設五〇周年の晴れがましい式典で、韓国教会



写真19 韓国教会設立30周年記念式典での奉献の儀 (2012・韓国佼成会提供)



写真20 韓国教会設立30周年記念式典での集合写真 (2012・韓国佼成会提供)
来賓の円仏教や伝統仏教の僧侶の姿もみえる

の布教功労者として表彰を受けた。また同年の春には、教会にしばらく出入りしなかった龍山支部の前支部長のNさんに対し、九星をみる相談役員という教会全体にかかわる役職を新設し、Nさんがそれに就任した。このように、退任した二人の前支部長は花道をかざり、関係改善と功績の尊重につながった。支部長辞任は本人から申し出たものとはいえ、当時教会長だった李京子や総務部長として教会運営に携わっていた李幸子（現、教会長）の心に深くひっかかっていたことだと推測されるが、二〇一四年にこれらのことがうまく着地したと思われる。

韓国校成会の将来について一つ気にかかることがある。それは幹部の年齢構成である。李幸子教会長は一九五八年生まれ、総務部長のFさんは一九五六年生まれ、城北支部の支部長（教務部長兼任）のSさんは一九五五年生まれ、龍山支部の支部長のGさんは一九五七年生まれ、儀旺支部の支部長のKさんは一九五六年生まれと、主要役職者の生年が一九五〇年代後半に集中していることである。横並びの年齢構成が世代交代で問題になる可能性は充分考えられる。

二〇一四年三月現在の韓国校成会の幹部の年齢構成をみよう。なお、支部長・副支部長のほか、城北支部は主任四人、組長二人、龍山支部は主任五人、組長一人、儀旺支部は主任一人、組長一人である。教会長、総務部長、教務部長（支部長兼任）は全員五〇年代後半である。城北、龍山、儀旺の三つの支部とも支部長は五〇年代後半である。副支部長は城北支部では六〇年代後半だが、龍山、儀旺支部は五〇年代後半である。主任は全体で二二人いるが、四〇代八人（三六・四％）、五〇代六人（二七・三％）、六〇代五人（二二・七％）、七〇代三人（二三・六％）である。組長は四人で、三〇代一人（二・二％）、四〇代五人（一一・四％）、五〇代二人（四七・七％）、六〇代八人（一八・二％）、七〇代七人（二五・九％）、八〇代二人（四・五％）である。年齢構成の

分布で顕著なことは、組長は五〇代の者が四八%と約半数で、五〇代以上ならば八六%となる。すなわち現在は働きざかりの五〇代が半数を占めるが、高齢化の傾向にあることは否めない。しかしながら、主任の場合、組長よりもむしろ若く、四〇代が一番多くなっている。支部別に見るならば、城北支部では、主任四名のうち二人、組長一二人のうち五人が七〇代であり、高齢化が進んでいる支部である。

このように見てみると、現在の韓国佼成会は五〇代を核にして活動層を担っているが、教会長、各部長、支部長、副支部長は六〇代後半の一名を除き、五〇代後半に集中している。また、韓国佼成会では当番修行を重要視するが、六のつく教会の休業日以外は毎日当番がある。当番に対する負担感も散見できるが、佼成会の当番のあり方は基本的に専業主婦であることが想定されている。就業する女性が増え、また親の介護の問題も生じてきている中で、今後いかにして当番を維持していくのかという問題がある。また、筆者が調査を始めた二〇〇四年と一〇年後の二〇一四年を比較すると命日の参拝者は減少しているように見えた。韓国佼成会では、月四回の命日はカレンダー通りに行っている。すなわち平日に当たる割合は高い。また大きな行事についても同様である。韓国佼成会では男性をいかに壮年部として取り込むか、青年部を活発にさせるかという課題があるが、韓国では仏教は女性の宗教としての位置づけも強いことから、活動会員はそのほとんどが女性である。したがって壮年部、青年部の活性化の課題とともに、社会状況の変化による女性の就労へどのように対応するか、現在は五〇代後半で働きざかりだが、今後の高齢化に向けてどのように対応するか等の課題は抱えている。しかし、韓国佼成会では新入会員もおり、これまでの事例でみてきたように、前教会長、現教会長の指導のもと、Kさんをはじめとして、今回は事例としてとりあげられなかったが、新たな支部長や総務部長はしっかりした信仰をもっている。韓

国校成会はある意味で日本でもなかなか貫徹できないほどに、厳密に当番を行っており、また活動の内実もある。今後の展開が期待されるとともに、社会状況の変化の中で校成会の役の中心を担う専業主婦が減少していくことに、どのように対応していくのが試されると思われる。

注

- (1) 二〇一四年二月に行った調査では、ソウル在住の韓国人と国際結婚した日本人女性（親が日本で校成会の会員）が一人、韓国校成会に入入りし始めていた。
- (2) 変更前はこれに加えて、五日虚空蔵菩薩命日、一八日薬王菩薩命日（韓国教会に大本尊が入った日）、二八日教会命日があった。また一〇日は観世音菩薩命日という名称を用いていた。二八日は元々、八幡大菩薩命日であったが教会命日とした。命日の名称で日本を想起させないように工夫していた。この点については渡辺二〇〇五・八七頁を参照。
- (3) 増改築費用一八億ウォンのうち約四分の一は本部からの寄付で、あとは韓国校成会でまかなった。
- (4) Pさんの資料については、二〇〇四年の聞き取り調査、同年のアンケート調査による。また、Pさんが支部長を辞めるにいたった事情や、支部のその後については、二〇〇九年に行った二代目の城北支部長になったSさんからの聞き取りと、二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一四年に実施した李幸子教会長（前総務部長）からの聞き取りによって構成した。
- (5) 校成会では一九八二年二月には当時の韓国連絡所長の滝口文男の依頼で李京子が韓国に戻った。同年一二月、連絡所から教会に昇格、また在日韓国人会員によるプサン布教、馬山布教の助成が開始した。さらに韓国布教の集いが本部で開催され、在日韓国人五〇人が出席したが、彼らに韓国での布教支援を呼びかけた。翌一九八三年には北九州教区で「韓国布教の集い」が開かれ、在日韓国人信者等六〇人が参加した（渡辺二〇〇五・九三）。したがってPさんが入会した一九八三年という年は、校成会で前から積極的に在日韓国人に呼びかけ、韓国布教を推進しようとしていた時期といえる。後述の龍山支部のNさんの母のCさんについても同様の時期に入会したことは、こうした状況と関連していると思われる。
- (6) ソウルオリンピックを契機として、一九八八年に海外旅行が自由化されたが、それ以前は招聘状をもらわないと日本に行

韓国立正校成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相

韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相

けなかった。

- (7) 韓国では守護尊神を祀っているのは、教会長家族の李家のほかP家、C家、N家のみである。李家は元在日韓国人、P家、C家、N家は近い親族が在日韓国人である。日本に対する親近感があることで、守護尊神の祀り込みが可能になったと思われる。

- (8) 一九九八年二月に在家仏教韓国立正佼成会として自主独立団体になった。これらの部長職をつくったのはこの出来事を契機としているように思われる。同時期に、PさんとKさんは布教部長、Nさんは教務部長になっている。なお、自主独立団体となる経緯については、渡辺二〇〇五・六六―六七頁参照。

- (9) 二日間の祈願供養では、毎日同じ時間に教会に来て、一〇時から供養、それから法座にすわる。法座にすわると教会長が話の内容を聞いて結んでくれ(結ぶ＝法の指導)、問題解決に向けての実践のやり方を教える。二日間という期間を区切ることによって、法座で人の話を聞いているうちに、本人自身感じるものがある。Pさんの場合、まずは導こうとする人を道場に誘い、教会長につないでいく。新たに来た人に対して李京子(前) 教会長は四柱推命で運命をみ、鑑定することから始まる。

- (10) 二〇〇四年に三人の支部長が同席して聞き取りをした時に、Kさんは、「P支部長さんはサウナに入っても話をしてお導きをする。Pさんはあきらめずにやる」と述べている。

- (11) 花祭りは伝統仏教では盛大に祝われ、その際提灯が毎年奉納される(渡辺二〇一〇・九二頁)。提灯には供えた人の名前を書く。花祭りの提灯は、一〇三万ウォン(約三〇〇〇円)で約一五〇〇個奉納される(伝統仏教では一〇五万ウォンから一〇万ウォン)。このうちの一〇〇個、Pさんが集めることはその貢献の度合いがわかる。花祭りの提灯に対する布施は教会の運営費用においても大きな部分を閉めている。

- (12) 韓国では靈魂崇拜がある。ムーダン(問題があつた時に先祖の中にこういう人はいないかと依頼者に尋ねる。しかし、ムーダンに頼んで供養するのには何百万ウォンと大きな金額がかかる。佼成会では「真心のお布施」でお金がかからず供養することができるというのも一つの魅力である。

- (13) 理事長一名、監査二名、理事五名、それに常務理事から構成される。

(14) 当番に来なくなった人はPさんの顔をみていたのではないかと李幸子は推測している。城北支部はPさんの力が強かったため、主任が育っていなかったという。

(15) Sさんが正式に支部長になって一年経過した二〇〇九年に聞き取りを行った。Sさんによると、城北支部の主任には高齢者が多く、鍼に行つて、翌日佼成会に行くという感じだったという。しかし、年配者のおかげで、母や姑の心を教えてもらったと述べている。また、「支部長にと言われた時には本当は行きたくなかった。城北支部は儀旺支部と雰囲気違った。儀旺支部の法座では法を話せたのに、ここでは自分の意見をいうだけで、井戸端会議みたいで、すぐけんかをしていた。パツとぶつかって火花が散ることはまだあるが、今は冷静だ」とも語っている。また、城北支部の会員の特徵として、「問題の原因は自分にあると受けとめるより、人に指示をして教えることが多い。子どもへの法統継承が弱い（あまり指導をするので子どもがついてこない、修行が大変なので子どもにも苦勞させたくないという理由なのではないか）、自分を変えていくという方向に持っていくのが大変だ」と述べている。

(16) 李幸子教会長はPさんを推薦するにあたって、以下の文章を会員特別表彰申請書に記入している「一九七九年二月二五日、韓国で初めて佼成会の入仏落慶式が行われました。大阪で入会された舅さんのお勧めで、連絡所を訪問され直ちに入会され、その時から李京子（前教会長、当時主任）の手足となって、お導き、手どりと頑張つてこられました。ご主人は一九九七年に韓国立正佼成会理事會設立時から理事として二〇〇六年まで活躍されました。長女は一九九四年四月海外修養生第一期生として入林しました。Pさんは身命を惜しまず、慈悲心にあふれ布教に全力を尽くされましたので、推薦させていただきます。」

なお、入林とは学林に入ることを表す。学林とは佼成会付属の養成機関で、海外修養生は一年目は日本語学校で日本語を学習し、二年目は教義等の専門科目、教会実習など佼成会のことを学ぶ。

(17) Nさんの資料については、二〇〇四年の聞き取り調査、同年のアンケート調査（母のCさんのものも参照）、および二〇〇七年に行つた聞き取り調査による。Nさんは、二〇〇二年二月（実質は二〇〇三年）に三支部制がとられた時に、教会にも近い地域である龍山支部の支部長になった。Nさんは二〇〇九年に支部長をおり、副支部長だった呉さんが二〇〇九年六月に支部長になった。二〇〇七年の調査は、Nさんが主任から反発を買い、その後弟のいるプサンに三カ月ほど行き、

韓国立正佼成会の支部組織の転機と韓国人支部長の信仰受容の諸相

ソウルに戻り、教会にも出始めた時期のものである。したがって、気持ちの上では落ち込みと反省がみられた。また、二〇一四年に行った二代支部長になったGさんからの聞き取り、二〇〇四年、二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一四年に行った李幸子（総務部長のちに教会長）からの聞き取りも参考にした。

(18) 年齢的な問題もあって、Nさんが支部長の役に就いたが、母のCさんの導きも四〇人以上あり、そのサポートは大きかったという。Nさんが支部長になった一カ月後にCさんは戒名室長という役についている。

(19) 龍山支部は地域的に教会にもっとも近い支部だったこと、Nさんの母のCさんの導きも多かったこと、またNさんは手どりはよくやっていたとのことである。

(20) 李幸子総務部長（当時）からの聞き取りによると、Nさんは二カ月間会員から強い反発を受けた。支部会員からNさんのやっていることは納得できないとの苦情がきた。Nさんは酒好きで、酒に飲まれてしまう。くずれたところを見られてしまった。支部長という役についているからには、日常生活での「後ろ姿」を律することが大切だ。韓国では宗教者が酒を飲んだり煙草を吸うことについては厳しい。それに対して、Nさんは酒を飲む理由を教会長が厳しい、儀旺支部のK支部長と比べられて差別された、それで自棄になり酒を飲んだと会員に言った。Nさんは派手好きで目立ちたいタイプで、Kさんと比較して思い通りにならないので自暴自棄になった。

(21) 戒名室長だったCさんがプサンに転居したので、城北支部、龍山支部からは主任各二人、儀旺支部からは三人が戒名担当になった。

(22) サムルノリとは、韓国の民俗音楽およびそれを演奏するグループ。四物（サムル）は杖鼓・太鼓・鉦・銅鑼（どら）の四種の打楽器。ノリは遊び、または演戯の意味。一九七八年に男寺党（ナムサダン。放浪芸人集団）の子孫である四人の青年が現代の民俗芸術として再創造した。（ブリタニカ国際大百科事典）

(23) 二〇一四年二月の聞き取り調査では、Gさんは李京子教会長（当時）から支部長になるように言われたが、受けるのが重かったと語っている。Gさんは一九八二年に入会、二〇〇一年に本尊を拝受、二〇〇八年九月に龍山支部の副支部長になり、Nさんが支部長を降りたあと、二〇〇九年六月に支部長になった。また、N前支部長については、学びたいことはなかった。期待もあったので、失望した。けれどもNさんは手どりは情熱的に行っていた。Nさんは今も龍山支部に所属しているが、あ

まり来ないとのことだった。

(24) 九星とは、一白・二黒・三碧・四緑・五黄・六白・七赤、八白・九紫の九つをいう。これに五行(木・火・土・金・水)と方位を組み合わせ、人の生まれた年にあてはめ、性格・運勢・家相などの吉凶を占う占術。

(25) Kさんの事例については、二〇〇四年の聞き取り調査、同年のアンケート調査、二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一四年に行った聞き取り調査を元に行っている。調査内容はかぶるものがあるが、二〇〇四年の調査については主に入会動機や伝統仏教との違い、信仰の受容について、二〇〇七年の調査ではKさんの支部の主任や組長からみたKさんの人柄や指導のあり方について、二〇〇九年の調査は特に二〇〇八年一月から六カ月間休んだことについて、二〇一四年の調査は信者の育成についてが主である。

(26) 二〇〇七年の時点では、Kさんは一日おきに教会に出ていた。これは夫との約束であるという。二〇一四年時点では月のうち二〇日出る。

(27) 現在は佼成会が日本の宗教であることへの抵抗はないが、Kさんは導きをする時、佼成会が日本からの宗教とはあえて言わない。法華経を勉強するところで、伝統仏教との違いは実践できるところだと説明する。教会は日本においては、サンガが強いのでつながると述べている。

(28) Kさんによると、伝統仏教に行きながら、むなしい感じがして、生長の家の『生命の実相』を読んだことがあるという。一時期「生活仏教の運動」が起こったとき、教材の一つが『生命の実相』で、寺で配っていた。

(29) 李京子教会長(当時)が具体的に生活で実践できるように教えるのに対し、それをもっと理論的に、学問的に裏付けするのが李幸子総務部長(当時、現教会長)で、それでバランスがとれているのではないかとKさんは述べている。

(30) 二〇〇四年の聞き取り調査で、当時教会長だった李京子は、Kさんの支部について次のように語っている。他の支部長はできないけれど、認めてほしいという感じだが、Kさんは認めてもらう努力をする。Kさんの支部はお通し、約束を守る。支部長の受け取り方が違うので、Kさんの支部の人はバリバリである。Kさんは理と体験の両方でいく。

(31) 前城北支部長のPさんの夫と前龍山支部長のNさんの夫は、韓国佼成会の理事だった。三支部長のうちKさんの夫だけが佼成会に出ていなかった。

- (32) 李幸子によると副支部長をつくった理由はKさんの体が弱かったからで、それに伴って他の支部にも副支部長をつくった。
- (33) 韓国佼成会は何につけきっちりしている。これは前教会長の李京子の指導であると思われる。時間はきっちり、やることもきっちり、Kさんは佼成会での緊張する奉仕が自分に辛かったと述べている。お役や行事で追われている時はよいが、ちよつと立ち止まると崩れる感じだったという。前教会長や現教会長（元総務部長）からみるとKさんの支部が他支部に比べてきっちりしている支部であると評価しているが、それはKさんに緊張を強いていた様子である。
- (34) 李京子教会長（当時）によると、夫が腰を痛めた時のKさんの対応はすばらしかったとのことである。
- (35) 李幸子はKさんについて次のように語っている。Kさんは法で受けて何でも自分にもつていく。自分でもサンゲ（懺悔）しながら相手に伝える。自分の体験を法に合わせて言う。それが人を救うのに役立っている。
- (36) 二〇〇七年の聞き取りの際、Kさんの支部の場合、文書担当、儀礼儀式、宝前莊嚴（お盛りもの、給仕）、手どり（連絡）、当番の作法、放送、給仕（接待）をある程度教え込んである。これがPさん、Nさんの支部との違いであると李京子教会長（当時）は述べている。
- (37) 二〇〇七年に行ったKさんの支部の主任・組長からの聞き取りの中でも、当番をはじめ、佼成会に多くの時間を使うことに対して夫側からの不満があるとの声が聞かれた。ある会員は最初は夫に佼成会の動きを言えなかったが、活動内容を言うようにして、土曜日、日曜日は夫のために時間を使ってほしいとの要望をいれ、話し合いの上、月曜日から金曜日は佼成会の活動日とした。また、別の人は、夫はよく言えば理解してくれるというか、妻が佼成会の活動をするのをあきらめていながら、何か活動するのにブレーキになるようなことを夫が言ったら、自分に何が足らなかったのかを考えるようにしているとのことである。また、子どもにとつて母親がいなくて寂しいというのは少しあるという。
- (38) 四諦とは仏教でいう人生の四つの真理。苦諦は苦悩の実態を直視し、見極める。集諦は十如是並びに十二因縁の法門に基づいて、苦悩の原因を反省し探求し、それをはっきりと悟る。滅諦は苦悩を消滅した安穩の境地、道諦は苦悩を滅するため

の菩薩道の実践（立正佼成会教務部二〇〇四・六二頁参照）。

参考文献

- 立正佼成会教務部『仏教の要諦』佼成出版社、二〇〇四年。
- 渡辺雅子「韓国における立正佼成会の展開過程——日本宗教であることの困難と在日韓国人による現地韓国人布教」、『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一一九号、二〇〇五年、三五—一〇〇頁。
- 渡辺雅子「韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容——現地化への取り組み」、『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一三三号、二〇一〇年、八三—一二八頁。

付記

韓国立正佼成会の李幸子教会長（前総務部長）、李京子顧問（前教会長）をはじめとして、仮名にさせていただいたが、現支部長のKさん、前支部長のPさんとNさんほか、多くの方々に聞き取り調査でお世話になった。さらに李幸子教会長には、卓越した日本語と韓国語によって通訳もやっていただいた。記して御礼の意を表する次第である。また個人的な情報を多々含むにもかかわらず、公表の許可をいただいたことに感謝申し上げます。

ここで扱う資料は、二〇〇四年、二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一四年に韓国佼成会で聞き取り調査を実施して収集したものである。なお、二〇一四年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究C「日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究」によるものである。